『比較論理学研究』第 9 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2011)

『エイサゴーゲー』における五つの語の区分

高 橋 祥 吾

1．はじめに

ポルピュリオスの著作『エイサゴーゲー』では，類，種，種差，固有性，付帯性の五つの語を説明することが主題となっている．本稿では，『エイサゴーゲー』において，五つの語がどのような理由で選ばれたのかということについて論じることを目的にする．別の言い方をするならば，なぜポルピュリオスは，『エイサゴーゲー』において類，種，種差，固有性，付帯性の五つの語について説明をしたのか，なぜこの五つなのか，という点について考察する．『エイサゴーゲー』は何を目的にして書かれたのものなのか．そして，本当にその目的に即して五つの語が選ばれているのか．この点について，十分かつ積極的な答えを提示するのは困難であるが，いくつかの論点を設けることで考察してゆくことにする．

まず一つ目の論点として，五つの語のそれぞれが，『エイサゴーゲー』の目的に対して適切に選定されたのかという点が考えられるだろう．例えば，『エイサゴーゲー』では，固有性と付帯性の扱いが，類，種，種差の三つと比較して，明らかに軽いように思われる．説明に費やされている量が，類，種，種差と比べて大幅に少ないのである．これは明らかにポルピュリオスが五つの語のうちで，類，種，種差の三つを，固有性や付帯性よりも重要視していた証拠と言えるであろう．このような説明の偏りは，著作の目的と関連しているのではないだろうか．

ポルピュリオスが，類，種，種差の三つを重視している理由は，『エイサゴーゲー』で語られていることに基づけば，類，種，種差は，アリストテレスのカテゴリーの理論[1]を知るためにも必要であり，また定義を与えるために，そして（おそらくはプラトンの）分割法と（アリストテレスの）論証にとって有用であるからである (1. 1-6)．それに対して，固有性と付帯性は本質を示すことはなく，本質を表す部分となることもない．定義の中にも，「ポルピュリオスの樹」に見られるような類種関係の連鎖の中にも，固有性と付帯性は見出されることはない．それでは，固有性や付帯性に積極的な位置づけを与えることは可能であろうか．

またもう一つの論点は，五つの語の区分の問題である．この点をアリストテレスとの関係で考えると次のようになる．『エイサゴーゲー』で扱われているこれらの五つの語は，遡れば，アリストテレスが『トピカ』の中で述べている「述語付けられるもの（以下，「述語様式」と記す）」に由来しているだろう．『トピカ』の中で，「述語様式」として挙げられているのは定義項，固

[1] 『エイサゴーゲー』の冒頭 (1. 3-4) では，εἰς τὴν τῶν παρὰ Ἀριστοτέλει κατηγοριῶν διδασκαλίαν(アリストテレスの諸々の述語付けについての教説のために) と述べられているが，ここの κατηγοριῶν を Κατηγοριῶν として，書名であると解釈することがある．例えば，アンモニオスは書名と理解しているように見える (Ammonius, *in Isag.* 30. 10-31. 7) が，ボエティウスのラテン語訳では書名ではない（ただし，解釈としては『カテゴリー論』の入門であると解釈している）．また，現代の翻訳者たちにおいても解釈が別れている．Tricot(1947)，Spade(1994) は書名として翻訳しているが，Barnes(2003)，水地 (1980)，Libera と Segonds(1998), Zekl(1998) は「述語付け」として翻訳している．本稿では Busse の校訂通りに，書名ではないと解釈している．Cf. Barnes(2003), pp. 25-26.

有性，類，付帯性の四つである．この四つの述語様式は，アリストテレスの考えでは，相互に排他的なものであり，そして網羅的なものであるため，述語様式はこの四つ以外にありえない．ポルピュリオスは，アリストテレスの述語様式のように，五つの語に排他性と網羅性を与えているのであろうか．つまり，ポルピュリオスは五つの語をどれほど体系的に考えているのかという点である．この点については，否定的な結論が得られることになるだろうが，多くの注釈者が五つの語の区分と体系化について論じている点は注目に値することであると思われる．

以上の二つの点について考察することにする．この二つの論点は，同じ対象を違う観点で見ているだけとも言えるため，内容として重なる部分が多い．しかし，注意しておきたいのは，最初の論点は，古代の注釈者たちやボエティウスなどが話題にすることが多く，二つ目の論点である区分の問題は，さらに後代になって取り上げられる議論であるということである．この違いは，ポルピュリオスの『エイサゴーゲー』の影響の変遷についてのひとつの見方を提供するだろう．

2.『エイサゴーゲー』の目的と五つの語

さて，ポルピュリオスは，『エイサゴーゲー』の目的に基づいて適切に五つの語を決定したと言えるのであろうか．すでに述べたように，『エイサゴーゲー』の冒頭では，アリストテレスの述語付けについての理解のためにも五つの語が何であるかを知ることが必要であると語られていた．しばしば，『エイサゴーゲー』が何の「入門書」であるのかが問題になるが，この冒頭の文から『エイサゴーゲー』がアリストテレスの『カテゴリー論』の入門書であると見なされることがある．実際，ボエティウスの注解では，『エイサゴーゲー』はアリストテレスのカテゴリーについての理論を学ぶためのものであり，『カテゴリー論』の入門書として意図されていると説明されている (Boethius, *in Isag*[1]. 4, 12-14; 15. 34; *in Isag*[2].143. 11-12; 146. 26-147.1)．しかし，Barnes によれば，『エイサゴーゲー』は『カテゴリー論』の入門書としてではなく，論理学の研究，ひいては哲学の入門書として書かれたものであり，たまたま『カテゴリー論』の入門にもなっているという (Barnes, (2003) p. XV)．実際，Barnes が引用しているように，アンモニオスも「この書物が哲学全体への道であることから，彼はこの書物に「エイサゴーゲー」という名を付けた」と言っている (Ammonius, *in Isag.* 20. 21-22.; cf. Barnes (2003), p. XV.)．しかし，その直後にアンモニオスは，「というのは，『カテゴリー論』はあらゆる哲学的な著作よりも先に立って (我々を) 導くが，他方で『エイサゴーゲー』は『カテゴリー論』よりも先に立って導くからである (Ammonius, *in Isag.* 20. 22-24)」と述べている．従って，『エイサゴーゲー』は最終的には哲学全体に対する入門として意図されていたと考えられるが，直接的には『カテゴリー論』の入門でもあり得るものと考えられる．

また五つの語を知ることは，分割法 (διαίρεσις) にも有用であると述べられていた．『エイサゴーゲー』では，種についての説明の中で『カテゴリー論』の名が挙がっている箇所があるが，そこでは十個のカテゴリーが最も高く，かつ第一の類であり，その数は十個であると措定されている (6. 6-7)．この十個の類がそれぞれ，種成的種差によって分けられて種を形成してゆく．ポルピュリオスは，最類 (γενικώτατα) から，種成的種差による分割をくり返すことで，最種 (εἰδικώτατα) に至ることができると考えている (6. 15-17)．このとき彼は，プラトンの名を挙げている．プラトンの名が挙がっていることから，この箇所でポルピュリオスは，いわゆるプラトンの「分割法」を想定していると考えられる．彼は，アリストテレスのカテゴリーの理論を下地にしながら，そこにプラトンの方法を取り入れていると言える．あるいは，ポルピュリオス以前の先人たちが，アリストテレスとプラトンの理論を総合し，それをポルピュリオスは参考にしているのかもしれない．カテゴリーの理論は，アリストテレス以外にも提唱した人物は存在したと考えられるから (Elias, *in Isag.* 36. 22-23)，アリストテレス以外のカテゴリー理論をポルピュリオスは知っていたかもしれない．

しかしながら，このような『エイサゴーゲー』

において五つの語を知る目的は，類種関係の中で重要な位置を占める類，種，種差の三つの必要性を説明し得るだけである．残る固有性と付帯性の二つについて，この二つを知る必要性は伺い知れない．ポルピュリオス自身は，固有性や付帯性が類や種，種差とどのように関係するのか，明確には語っていない．

ボエティウスは『第一注解』の中で，すべての事物の相違性 (disparilitas) は，「実体」と「付帯性」という一対の原理に分けられ，この実体と付帯性の中に，類，種，種差，固有性が含まれていることを見出す．そして類がそれ自体としてあるのは，諸々の種が，種差と固有性によって特徴づけられることで，下に置かれ，帰属させることによってであると考えている．ここでは，実体の中に類，種，種差，固有性が位置づけられ，付帯性は実体と対になっている．そして，実体に含まれている四つのものが定義づけに用いられるが，付帯性は誤った定義づけに用いられる可能性があるために，『エイサゴーゲー』で説明されていると，ボエティウスは説明している (Boethius, *in Isag*[1]. 6. 3-7. 4.).

また，『カテゴリー論』の入門書としての側面から見ると，五つの語が『カテゴリー論』の中で使用されている用語であるということから，『カテゴリー論』では解説が行われていない五つの語を説明することを『エイサゴーゲー』が引き受けていると見ることもできる[2]．『カテゴリー論』では，実体について述べている第5章の中で，類，種，種差は言及され，固有性は「実体の固有性」や「性質の固有性」というような形で使われている．また，付帯性も「関係」のカテゴリーについての説明の中に出てきている．

しかしながら，『カテゴリー論』での固有性の用いられ方は，類や種と同じレベルではない．類や種は，『カテゴリー論』において「実体」のカテゴリーの中に含まれるものとして説明されていると言ってよいであろう．しかし，その一方で，固有性は，固有性自体が他の類や種などといかなる関係を持っているのかが問題とされているわけではない．『カテゴリー論』の中で，固有性は直接的な考察対象ではない．『カテゴリー論』において固有性の意味を知ることは，類や種について知ることが直接的な意義を持つと言ってよいならば，間接的な意義しか持たないと言えるだろう．また，付帯性についても，「関係」のカテゴリーの中で用いられている付帯性は，非常に特殊な扱われ方をしている．「奴隷」と「主人」という関係において，「人間」が付帯性と見做されているのである (*Cat.* 7a25-30). このような『カテゴリー論』に見出される五つの語の扱いを考慮するならば，ポルピュリオスは五つの語の選定の基準として，類，種，種差はともかくとして，固有性と付帯性を『カテゴリー論』の中で用いられているという理由で選択したとは考え難いものがある．『エイサゴーゲー』の目的という観点からは，固有性と付帯性の必要性は非常に曖昧であるように思われる．

この固有性や付帯性の位置付けに関して，古代の注釈者はどのように考えていたのだろうか．アンモニオスは，固有性は，実体的なもの (οὐσιώδες) と，属性的なもの（ἐπουσιώδες）との両方に共通するものを持っていると説明する (Ammonius, *in Isag.* 109. 1-7). さらに後代のエリアスとダヴィドは，連続する変化は，身体や事物にだけでなく，概念にも存在するから，固有性は，実体的なものから属性的なものを連続させる役割を持って，両者の間に位置付けられていると考える．ここで，「実体的なもの」と言われているものは，類，種，種差のことであり，「属性的なもの」は，付帯性のことである．エリアスやダヴィドは，ポルピュリオスの説明の順番が，種差の後で付帯性の前であるということも意識しているように見える (Cf. Davide, *in Isag.* 98. 32-99. 29).

そして，エリアスが説明するところでは，固有性は属性的なものであり，「ひとつのものだけに，本性的に属する」ものが固有性と呼ばれ，多くのものに属するものが付帯性と呼ばれるという (Elias, *in Isag.* 36. 16-19). ダヴィドも基本的には，固有性は属性的なものであるとするが，

[2]この点について，Barnes もまた，ポルピュリオスの挙げる五つの語がアリストテレスの『カテゴリー論』の中に見出されること，そして『カテゴリー論』の内容に入る前にこれら五つの語が説明される必要性から『エイサゴーゲー』が書かれたという推測をしている．Barnes (2003), pp. 28-29.

場合によっては実体的なものであると説明する．(Davide, *in Isag.* 98. 28-32)．そして，エリアスやダヴィドは，固有性を「換位する付帯性」とまとめている (Elias, *in Isag.* 90. 14; Davide, *in Isag.* 202. 22)．従って，固有性は付帯性のある特殊な場合として解釈されてきたと言えるだろう．

以上のように，『エイサゴーゲー』の目的が，アリストテレスの述語付けや，分割法や定義の理解であるということから五つの語を考えると，固有性と付帯性の位置づけが十分に説明しきれない．そこで，五つの語が排他的関係を持ち，さらに網羅的な関係も持つのではないかという点を吟味してみたい．特に，五つの語が網羅的であるとすれば，固有性と付帯性も全体を構成する重要な要素として位置づけられていることになるだろう．この点を考察するために，まずはアリストテレスの四つの述語様式との比較から始めたい．

3.「五つの語」の排他性と網羅性

さて，『エイサゴーゲー』の成立にもっとも影響を与えているのは，アリストテレスの『トピカ』であるように思われる．すでに触れたように，アリストテレスは『トピカ』の中で，定義項，類，固有性，付帯性の四つを「述語付けられるもの（述語様式)」として挙げている．『エイサゴーゲー』の中では，『トピカ』への言及は行われていないが，関連は明白であろう．とはいえ，アリストテレスの四つの述語様式と異なり，『エイサゴーゲー』では定義項がなくなり，その代わりに種と種差が導入されている．この両者の違いに関する評価は，様々であるが，少なくともアリストテレスにとっての四つの述語様式の役割と，『エイサゴーゲー』における五つの語の役割は，大きく異なることになるだろう[3]．ポルピュリオス本人の意図は分からないが，少なくともポルピュリオスの五つの語とアリストテレスの述語様式では，それぞれの位置づけも変わらざるをえないだろう．以下では，アリストテレスの述語様式と対比させながら，『エイサゴーゲー』における五つの語の位置づけについて考えてみたい．

アリストテレスの『トピカ』における述語様式について概観しながら，『エイサゴーゲー』との違いを検討してゆく．アリストテレスは，すべての問題と前提命題は，固有性，類，そして付帯性のいずれかを明らかにすると述べる．そして，「固有性」には，定義項と（狭義の）固有性の二つがあるとして，「固有性」を二つに分けることで述語様式を四つにしている．この時，定義項と固有性は本質を示すか否かで区別される (*Top.* A 4, 101b16-25)．従って，アリストテレスがまずはじめに立てた述語様式は，固有性，類，付帯性の三つである．アリストテレスにとって，固有性という述語様式は，広義には定義を含むものとして位置づけられている．『トピカ』の場合はこの点に，固有性の重要性を見出すことができる．それに対して『エイサゴーゲー』では，先に述べたように，定義項が外され種が取り入れられているため，固有性の重要性は明らかに『トピカ』の場合よりも低下している．その一方で，付帯性は，アリストテレスの場合，その重要性は一見して明らかとは言えないかもしれない．しかしながら，付帯性についてのトポスは，命題が真であるか否かを判定するために有用であることが述べられており (*Top.* Z 1, 139a36-b5)，『トピカ』においては，付帯性は必要とされる場面が存在する．しかし，『エイサゴーゲー』では，『トピカ』と同じような位置づけは望めない．そして『トピカ』においてすべての命題は，四つの述語様式のいずれかを明らかにする．『トピカ』A 巻第 8 章でアリストテレスは，推論によって述語様式を排他的且つ網羅的に判別してみせている (*Top.* A 8, 103b1-19)．このようにアリストテレスは，四つの述語様式が排他的で網羅的であると考えている．アリストテレスの述語様式の定義づけが成功しているのかどうかという問題はあるにせよ[4]，四つの述語様式が排他的で網羅的な関係

[3]例えば，Ross や Kneal らの評価は，アリストテレスの四つの述語様式を劣化させたものとして『エイサゴーゲー』の五つの語を評価する．それに対して Evangeliou や de Rijk は，Ross たちの評価は不当であるとして『エイサゴーゲー』の弁護を行っている．Ross (1995) p. 55; Kneal & Kneal (1962), p. 186; Evangeliou(1985), p. 16, p. 22, p. 27-31. ; de Rijk (2002), p. 479-480.

[4]アリストテレスの述語様式が，適切に定義づけられて

にあるならば，考察対象の定義項を，定義項以外の三つの述語様式でないことを示すことで，間接的に特定することが可能になる．定義の探究を目的とすること，そして与えられた命題が定義項を明らかにしているか否かを，問答法を通じて吟味すること，このような目的に関連して述語様式が設定されていると考えるならば，述語様式が排他的に規定されていることに意義が存在するだろう．

その一方で，『エイサゴーゲー』は排他的で網羅的なものとして五つの語を規定しているのであろうか．『エイサゴーゲー』において，五つの語の関係は，まず排他的関係を構成しているようにはみえない．そして，ポルピュリオス自身も，五つの語についてこのような相互関係を述べてはいない．少なくとも，アリストテレスの述語様式の場合とまったく同じような関係を五つの語の中に見出すのは困難である．この点に関して，ひとまずアリストテレスの述語様式との違いという観点から，『エイサゴーゲー』における五つの語の位置づけを考えてみることにする．先にも述べたが，定義項をなくしたことにより，固有性を定義項と関連させることができなくなっている．そのため，『エイサゴーゲー』では，固有性は付帯性との関連が強くなっている．この点は，先に見たように，古代の注釈者たちが説明している通りであるだろう．定義項はリストからなくなったが，ポルピュリオスは『エイサゴーゲー』の内容は定義を知るためにも有用であると述べていた．この点は種差を類から区別することによって解消されていると考えることができる．定義項は，類と種差が複合したものであると考えられているので，類と種差についての説明が定義の理解に繋がると考えられるだろう．

そして種の導入により，種が述語となる場合，つまり主語が個物となる場合が容認されるようになった．アリストテレスの場合，『トピカ』で想定されている命題は基本的に個物を主語としない．述語様式の中で個物を主語にする可能性があるのは，付帯性だけである．しかし，それも『トピカ』の中で明言されているわけではない．その他の三つの述語様式はいずれも全称命題を構成するものとして考えられている．また種は類と相対的な関係にあるため，最種と最類以外の類と種は中間的なものとして考えられる．このとき，述語としての種の説明は基本的に最種にのみ該当するようになってしまう．というのは，五つの語が基本的に述語の分類であるとすると，種は基本的に主語の位置に現れるため，最種以外に述語として現れることができないからである．この点で，アリストテレスの述語様式の分類が，命題の述語が明らかにするものの分類であり，実際に述語となっているものについての分類であることと比べ，『エイサゴーゲー』では種が主語となるために述語の分類ではなくなっているという点で明確に異なるのである．

このような五つの語に対して，後世の解釈として，五つの語の区分について説明しているものが存在する．例として，カイサリアのアレタスとビュリダヌスの区分を挙げてみたい．カイサリアのアレタスは，五つの語がそれ以上多くも少なくもないと述べる．そして，音声の区分を通じてそれを示して見せる．まず音声には「人為的なもの」と「人為的ではないもの」の二つがあり，この二つのそれぞれは，「有意味なもの」と「無意味なもの」に別れる．「人為的で有意味な」音声のあるものは「普遍的なもの」であり，別のあるものは「部分的なもの」である．普遍的なものには，「実体的なもの」と「属性的なもの」があり，実体的なものは，ひとつの本性に適合するか，多くの本性に適合する．ひとつの本性に適合し，「何であるか」において述語付けられるならば，「種」になり，「如何なる性質か」において述語付けられるならば，「実体的な固有性」になる．他方で，多くの本性に適合し，「何であるか」において述語付けられるならば，類が生じ，「如何なる性質か」において述語付けられるならば，種差が生じる．また，「属性的なもの」のうちで，ひとつの本性に適合するならば，「属性的な固有性」が生まれ，多くの本性に適合する場合は，分離的で

いないという問題については，Brunschwig や Slomkowski を参照のこと．Brunschwig(1967), pp. LXXVI-LXXXIII; Slomkowski(1997), pp. 69-94.

あれ，不可分離的であれ，共通的な付帯性が生じることになる (Arethas of Caesaea, *in Isag.* 2. 4-18).

アレタスの区分は，事実上，六つのものを生み出すことになっている．すなわち，固有性が「属性的な」それと，「実体的な」それとに別れてしまっている．この固有性をひとつにまとめることで，五つの語としている．この時，二種類の固有性を，同じ固有性としてまとめてしまうのは，かなり違和感があるように思われる．そのため，この区分はすでにポルピュリオスの五つの語の区分としては逸脱していると言ってよいような，別の区分となっていると言うべきであろう)[5].

また別の区分方法も見ることにしよう．ビュリダヌスは，彼自身が賛成する可述語 (praedicabilia) の区分と，反対する可述語の区分を紹介している (S, 2. 1. 3.). まず，ビュリダヌスの支持する区分は，「何かに述語づけられるところのもの」に対して，「本質的に (essentialiter) 述語づけられる」か，「派生的に (denominative) 述語づけられる」かで区分される．このときビュリダヌスは，「本質的に」と「派生的に」という区別が反対のものによって (per opposita) 与えられていると述べ，それゆえにこの区分は網羅的であると言う (S, 2. 1. 3. : 12). そして，「本質的に述語づけられる」ものは，「「何であるか (in quid)」において述語づけられる」か，「「如何なる性質か (in quale)」において述語づけられる」かのどちらかであると考える．ビュリダヌスはここで，in quid と in quale という区別方法を採用する．そして，「「如何なる性質か (in quale)」において述語づけられる」ものは，種差であり，「「何であるか」において述語付けられる」ものは，「種において異なる多くのものに述語づけられる」か，「数において異なる多くのものに述語づけられる」かによって，さらに二つに分けられる．前者は類であり，後者が種となる．その一方で，「派生的に (denominative) 述語づけられる」ものは，主語と換位しうるものであるか否かで，二つに分けられる．換位しうるならば，固有性であり，しないならば付帯性ということになる．ビュリダヌスは「本質的に (essentialiter) 述語づけられる」の下位区分として，in quid と in quale という区別を導入している．この区分は，アレタスにおいても現れた区分であり，「何であるか」という区分は，類の定義に由来する．その一方で，in quale の方も，アリストテレスに由来するようにも思われる[6]．アリストテレスは『トピカ』の中で，種差について言及している時，「いかなる種差も「何であるか」を意味表示することはなく，むしろ「如何なる性質であるか」を意味表示する」と述べている (*Top.* Δ 2, 122b16-17)[7]．このような類（および種）と種差を区別するための in quid と in quale による区分は，他の注釈者たちによっても用いられているものであり，重要な位置を占める[8].

さて，ビュリダヌスの紹介する区分に戻る．彼が言及しているもうひとつの賛成できない区分は次のようになる．まず，「何かに述語づけられるところのもの」が，in quid と in quale の区別によって分けられる．in quid のよって分けられたものは，類か種である[9]．他方で，in

[5]アレタスは，別の分け方も示している (Arethas of Caesaea, *in Isag.* 2. 19-3. 2). その基準は，‘τί ἐστιν, ὁποῖον τί ἐστιν, ὁποῖόν ἐστι, ποῖον ἐστι, πῶς ἔχον ἐστίν’(2. 21-22) の五つである．こちらの分け方はポルピュリオスの意図と完全に離れてしまっていると言って良いだろう．

[6]もちろん『エイサゴーゲー』にも in quid と in quale の区別の由来になるような箇所は存在する．Cf. 11. 7-17; 15. 3.

[7]『トピカ』における類と種差の違いについての言及は，第4巻第6章にもある．*Top.* Δ 6, 128a20-29.

[8]さらに詳しい中世における in quid と in quale による五つの語の区分と ‘sufficientia praedicabilium’ については，de Libera を参照のこと (de Libera(1998), pp. CXXIII-CXXVII). そして，このような区分は，例えばヒスパヌスやシャーウッドのウィリアムには明確な形では見出されない．de Libera の述べるように，この区分がアヴィセンナに由来するのであれば，ヒスパヌスやシャーウッドにはアヴィセンナの影響は薄いということになるだろう．また，de Libera は紹介していないが，例えば，オッカムも独自の区分を示している (OPh. I. *Summa Logicae*, pars I, cap. 18. pp. 62-65; OPh. II. *in Isag.*, prooemium.164-197).

[9]この異論において類と種がどのように区別されるのかについて，ビュリダヌスは明言していないが，「「何であるか (in quid)」において述語づけられる」という基準からさらに類と種を分ける基準は，ビュリダヌス自身が提示している，「種において異なる多くのものに述語づけられる」か「数において異なる多くのものに述語づけられる」ということであろう．共通している部分は省略して述べなかったのだと思われる．

quale によって分けられたものは，「本質的に (essentialiter) 述語づけられる」か，「付帯的に (accidentaliter) 述語づけられる」かによって分けられる．前者は種差であり，後者はさらに「換位しうる」か否かによって分けられる．換位しうるならば固有性であり，しないならば付帯性である．

ビュリダヌスは，この彼が反対する区分について，in quid や in quale 以外の，他のカテゴリー（例えば「どれだけの量か (in quantum)」）において述語付けられる場合を基準として考えれば，五つ以上の可述語を生じさせてしまうことになるという点で批判している (S. 2.1.3. : 29-32)．すでに見たように，in quid と in quale による区別は，ビュリダヌスの採用する区分でも用いられているが，ビュリダヌスの場合，「本質的に (essentialiter) 述語づけられる」ものの下位区分であるため，in quid と in quale 以外の述語付けはあり得ないということであろう．ビュリダヌスにとっては，例えば「「どれだけの量か (in quantum)」において述語付けられる」ものは，本質的に (essentialiter) 述語づけられることはあり得ないのである．その点で「本質的に (essentialiter)」という基準は，述語が実体のカテゴリーを表すかどうかを区別する基準であると言える．

さて，以上のような五つの語の区分に関して，いずれの区分が一番適切であるかを吟味することは，本稿の主眼ではない．ポルピュリオス自身は，五つの語に対して，注釈者たちが行っているような明確な区分を提示していない．そしてまた，別の区分を作ることが可能である．それは例えば次のようになるのではないかと考えられる[10]．

- 類： Pが種において異なる多くのSに本質的に述語付けられる
- 種：Pが数において異なる多くのSに本質的に述語付けられる
- 種差：Pが種において異なる多くのSに性質的に述語付けられる
- 固有性：Pが数において異なる多くのSに非本質的に述語付けられる
- 付帯性：Pが数において異なる多くのSに付帯的に述語付けられる

この区分は，ビュリダヌスが問題にしたような網羅性は考慮されていない．しかし，五つの語の区分には成功していると言っても良いように見える．このように，五つの語の区分は，ある程度のかなり任意に基準を設定することが可能である．さらに，Barnes も指摘している通り[11]，これらの区分に基づいた五つの語それぞれ定義は，ポルピュリオス自身が説明する定義とは大きく異なる．類の定義のみが，ポルピュリオスの説明に即していると言うことができるだろう．注釈者たちの区分は，多くの場合，種差と固有性と付帯性の定義と合致しない．また，種の定義も基本的に最種にのみふさわしいものであり，そもそも類種関係が相関的である点を考慮すれば，類と種の定義を区別することは困難であろう．注釈者たちによる区分による五つの語の体系化は，五つの語のそれぞれの定義の説明の後に行われている，五つの語の相互の共通点と相違点の説明に基づいている側面がある．しかし，ポルピュリオス自身は，五つの語について共通点と相違点をあげている時，何らかの体系的な組織化を意識していたというよりは，彼が記述している通り，五つのうちの二つを取り上げて，その組み合わせのそれぞれについて共通点と相違点を述べているに過ぎないのであろう．

4. まとめ

以上のように，ポルピュリオスが『エイサゴーゲー』において五つの語を体系的に秩序付けたとは言えず，五つの語は著作の目的に応じた必要性と，それに付随する偶然性によって選定されたと考えるべきであるように思われる．すなわち，ポルピュリオスは，著作の目的に即して，

[10] この区分は Evangeliou(1985) に基づいている．Evangeliou(1985), p.32. Barnes による区分も別に存在する．Barnes(2003), p. 306.

[11] Barnes(2003), pp. 308-309.

類種関係の理解を助ける三つの語，類，種，種差についての説明を必要なものとした．他方で，固有性と付帯性は，先の三つに比べ『エイサゴーゲー』における必然性は見出せない．そのため，『エイサゴーゲー』において取り上げられる対象は，三つでも良かったであろうし，逆に個物を含めた六つでも良かったであろう[12]．これら五つの語は，『エイサゴーゲー』が書かれた時代に，何らかの歴史的な経緯によって目立っていたのかもしれない[13]．『エイサゴーゲー』は，明らかにアリストテレスとペリパトス派の見解に基づいていることを考えるならば[14]，『トピカ』において，固有性や付帯性と類が同じ述語様式に属していることが，ポルピュリオスに固有性と付帯性をキータームとして採用させたのかもしれない．いずれせよ，ポルピュリオスの五つの語は，アリストテレスの述語様式とは異なる意義を持つことになり，後世においてアリストテレスとは異なる区分と体系化が求められることになったのである．

・Primary Text

Busse, A. (ed.), (1887), *Porphyrii Isagoge,* CIAG IV.1, Berlin.

・Ancient and Mediaeval Texts

Ammonius: A. Busse (ed.), (1891), *Ammonius in Porphyrii Isagogen sive V Voces*, CIAG IV.3, Berlin.

Arethas of Caesarea: M. Share (ed.), (1994), *Arethas of Caesarea's scholia on Porphyry's* Isagoge *and Aristotle's* Categories, Corpus philosophorum Medii Aevi ; Commentaria in Aristotelem Byzantina I, Athens.

Boethius: S. Brandt (ed.), (1906), *Anicii Manlii Severini Boethii in Isagogen Porphyrii Commenta*, Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum XXXVIII, Vienna.

Buridanus: L. M. de Rijk (ed.), (1995), *Summulae: De praedicabilibus*, Summulae Vol. II. Artistarium Supplementa Vol. 10-2. Introduction, critical edition and indexes by L. M. de Rijk, Nijmegen.

Buridanus: N. J. Green-Pedersen (ed.), (2008), *Quaestiones Topicorum*, Introduction, critical edition and indexes by Niels Jorgen Green-Pedersen, Turnhout.

Davide: A. Busse (ed.), (1904), *Davidis Prolegomena et in Porphyrii Isagogen commentarium*, CIAG XVIII.2, Berlin.

Elias: A. Busse (ed.), (1900), *Eliae in Porphyrii Isagogen et Aristotelis Categorias commentaria*, CIAG XVIII.1, Berlin.

・Other References

Barnes, J., (2003), *Porphyry: Introduction*, Oxford.

Bruschwig, J., (1967), *Aristote: Topiques I-IV*, Paris.

De Libera, A. and A. -P. Segonds, (1998), *Porphyre: Isagoge*, traduction par A. de Libera et A. -P. Segonds, Introduction et notes par A. Libera, Paris.

De Rijk, L. M., (2002), *Aristotle: semantics and ontology. Volume I*, Leiden.

Evangeliou, C., (1985), 'Aristotle's doctorine of Predicables and Porphyry's *Isagoge*', *Journal of the History of Philosophy* 23, pp. 15-34.

Ross, W. D., (1995), *Aristotle*, Sixth edition(first published 1923), London and New York.

Slomkowski, P., (1997), *Aristotle's Topics*, Leiden.

Spade, P. V., (1994), *Five Texts on the Mediaeval Problem of Universals: Porphyry, Boethius, Abelard, Duns Scotus, Ockham*, Indianapolis.

Tricot, J., (1947), *Porphyre: Isagoge*, Paris.

Kneale, W. & M. Kneale, (1962), *The Development of Logic*, Oxford.

Zekl, H. G., (1998), *Porphyrios: Einführung in die Kategorien des Aristoteles*, in *Aristoteles: Organon 2*, Darmstadt.

水地宗明（訳）, (1980), 『イサゴーゲー』, 世界の名著 15, 中央公論社.

（たかはし　しょうご，　広島大学［哲学］）

[12]ポルピュリオスは五つの語すべてに共通な特徴を挙げる時，個物 (ἄτομος) について言及している (13. 10-21).

[13]Barnes(2003), p. 311 を見よ.

[14]例えば，類の記述は『形而上学』第5巻第28章の記述に比較的類似している (*Metaph.* Δ 28, 1024a29-b16). また，本文でも述べているように，固有性や付帯性の定義は，『トピカ』に由来している．その一方で，他の学派の影響については明らかなことは言えないであろう．de Libera はストア派の影響を主張しているが，Barnes によって de Libera の諸論点すべてがひとつひとつ検討され，批判されている．ストア派の影響については，Barnes の見解の方が説得力があるように思われる．de Libera(1998), pp. XXVII-XXX; Barnes(2003), pp. 312-317. その一方で，Barnes 自身は，ポルピュリオスの提示した付帯性の定義に，エピクロスが影響している可能性を見ている (Barnes(2003), pp. 356-358).